天辰 Amatatsu

鹿児島純心女子大学・大学院　広報誌

2012.12 No. 24

発行：鹿児島純心女子大学・大学院
広報委員会
〒895-0011 鹿児島県薩摩川内市天辰町2365番地
TEL 0996-23-5311
FAX 0996-23-5030
http://www.k-junshin.ac.jp/jundai/

地域に学ぶ
教員養成センター平成24年度取組み紹介

教員養成センターでは実践的指導力を有する教員を養成するため、薩摩川内市教育委員会の協力をいただいて、平成23年度に「地域連携教育プロジェクト」を構築しました。事業の一つに「地域貢献活動」があります。そのなかの「教職フィールドワーク」と「地域教育活動」を紹介します。

1年間学校に密着

□教職フィールドワーク

「教職フィールドワーク」は、「学校インターンシップ（9月に5日間の学校体験）」を履修した学生が、大学の授業の傍ら1年間、当該校の周辺業務に携わることで、学校や教職についての理解を深め、教師としての基盤を培うものです。本年度は9名が4小学校で、読書指導や清掃活動、学習指導の補助、学校行事の指導補助等、多岐にわたる業務に携わっています。日々の活動や児童との関わりの中で生じる様々な問題、それらをどのように受け止め、どう対処すればいいのか、悩みながら、そして先生方に相談しながら、一生懸命に取り組んでいます。大学の授業で学んだことの一つ一つが、学校現場で生起する具体的な出来事と結びつき、教職に対する「やりがい」を感じています。

夏休みにスキルアップ!!

□地域教育活動

「地域教育活動」は、「水引キッズ」（本県の「郷中教育」の伝統を継承する「かごしま地域塾」の一つ、水引小学校の児童中心）の夏休みの自然体験を含む様々な直接体験を、学生たちが学科の特色を生かして企画立案し指導します。本年度は、「鹿児島純心女子大学探検隊」「食事のマナー」「草木染め」「郷土料理をつくろう」「パネルシアター」等のほか、下甑島での2泊3日の活動にも参加しました。学生は地域の教育力の重要性を認識しながら、学校・家庭・地域の役割と連携・協力体制について考え、併せてマネジメント能力やコミュニケーション能力を高めます。

身体と頭を使った遊び

平成25年度公立学校教員採用試験結果 13年間で155名輩出

No	校種・科目	自治体	学　科	出身高校
1	中学校（英語）	鹿児島県	英語コミュニケーション学科	加治木高校
2	中学校（英語）	鹿児島県	英語コミュニケーション学科	鹿屋高校
3	中学校（英語）	静岡県	国際言語文化学科	大島高校
4	小学校	鹿児島県	こども学科	鹿児島玉龍高校
5	小学校	神奈川県	英語コミュニケーション学科	鹿児島純心女子高校
6	特別支援学校（家庭）	鹿児島県	健康栄養学科	鹿児島高校
7	特別支援学校（保健体育）	鹿児島県	こども学科	鹿児島南高校
8	特別支援学校（保健体育）	北九州市	こども学科	加世田高校
9	養護教諭	鹿児島県	看護学科	伊集院高校
10	養護教諭	鹿児島県	看護学科	鹿児島玉龍高校

限られた時間をどう有効に使うかが必勝の鍵

教員採用試験合格!!
小学校（鹿児島県）

こども学科 4年
鮫島未来さん
（鹿児島玉龍高校出身）

本学は、資格をたくさん取る学生が多く、授業が詰まっていて本当に忙しいと思います。しかし、そんなことは言っていられません。臨時採用で勤務されている先生はもっと時間がありません。どれだけ教師になりたいか、その気持ちが強い人が教員になっていきます。時間は少ないかもしれませんが、だからこそ、限られた時間をどれだけ集中して有効に活用できるかが必勝の鍵になります。例えば私は、音楽の共通教材の歌をiPodに入れて、他の音楽はほとんど聞かず、通学中のバスや車の中などの移動時間は何度も再生しました。バスに乗る1時間を寝て過ごすのか、勉強するのか、1日ではたった1時間かもしれませんが、年間を通すとその差は歴然とします。

今、教員になるという夢を叶えることができましたが、これからが勝負だと思っています。子どもの未来を担う重大な責任を有する仕事ですが、子どもたちに夢を与えられるような教師になりたいと思います。

先生方の姿に学ぶ

学校インターンシップ

こども学科 1年
糸山亜也香さん
（神村学園高等部出身）

「こどもの見本であり、大変な職業」というのが教師のイメージでした。漠然としているのは教師の視点に立っていないためでした。これが変化したきっかけは、9月の学校インターンシップに参加したことです。

不安と期待を持ち、薩摩川内市内の小学校での5日間のインターンシップに臨みました。学んだことは多く、授業を見て気付いたことは先生方が楽しんでいることです。ある先生が「授業することはまず自分が楽しい」と言われていました。その授業を受けている子ども達も楽しそうだったことを思い出しました。これを通して授業に「楽しみながら」という要素を入れることで、子ども達も楽しく授業が受けられ、興味関心や理解度が高まっていくと学びました。また、先生方が子どもを褒めることで意欲を高めることなど、先生方の言葉と行動の一つひとつに意図がありました。

この5日間で私の教師のイメージは大きく変化しました。今回経験したことをこれからの勉学に活かし、教職としての資質を向上させていきたいと思います。

早期に教師の視点を養う

被災地ボランティア報告座談会

学生会が設立した支援制度『東日本大震災被災地へのボランティア派遣支援制度』等の支援を受け、国際人間学部の1年生5名が平成24年9月3日～5日の3日間、東日本大震災の被災地ボランティアに参加した。南三陸町の米川ベースを復興支援の拠点として、瓦礫撤去や漁業支援（漁具の手入れ）などの活動を行った。学生に先駆けて被災地に現地入りし、その活動を紹介した山口准教授をコーディネーターに迎え、それぞれの思いを語ってもらった。

穂満：じっとしていられなかった。他人事にしたくなかった。自分にできることがあるならやりたいと思った。

山口：皆それぞれの思いが今回の機会を得て、具体的な行動に移せた、ということですね？

松本：当時、高校生だったので、方法が無かった。日常とかけ離れた映像を見て、大学生になったら現場を見に行きたいと思っていた。

池田：高校の先生が福島出身でパニックになっているのを見て、自分も家族がいたら、と考えた。大学のサポートがあったから、行けたんだと思う。

いてもたってもいられない。思いを形にできる情報やチャンスを得たので、行動に移した。

――活動に参加しようと思ったきっかけは？

原口：もともとボランティアに興味があったが、高校生の時はできなかった。

早﨑：高校生の時からボランティアには参加していたが、震災の時は部活や受験で時間を作れなかった。入学してから山口先生のスライドを見て、行かなければと思った。

写真では分からない現実。被災者の方々の姿。

――活動を通して印象に残ったことは？

早﨑：復興は進んでいない、というのが印象。瓦礫撤去の活動をしていて、日用品などを見ると、ここに生活があったのに、と思った。

穂満：まだまだ進んでいない。テレビとは違う。

山口 明美 准教授

原口 友希さん
ことばと文化学科１年
国分高校出身

早﨑 安侑美さん
こども学科１年
熊本県・八代南高校出身

池田 昌古さん
こども学科１年
伊集院高校出身

松本 華澄さん
ことばと文化学科１年
鹿児島玉龍高校出身

穂満 真里奈さん
こども学科１年
鹿児島南高校出身

松本：震災関連のニュースは目を通すようにしていたが、実際に見てショックを受けた。

池田：津波が到達した所まで木が枯れているのを見て、自然の恐ろしさを感じた。胸が痛かった。

原口：行ってみないと分からない。もっと知って欲しい。

松本：参加して得られたものは大きい。そこで出会った人とは、今でも連絡を取り合っている。

早﨑：被災者の方から、「毎日ありがとう」と声を掛けてもらった。参加させてもらっているのに。

穂満：辛い思いをしているはずなのに、被災地の方々は、思ったより元気だった。

池田：フレンドリーで温かかった。鹿児島から来た、と言うと、喜ばれた。

山口：また行きたい？

全員：絶対行きたい。

松本：作業は全然辛くなかった。時間が過ぎるのが早かった。次はもっと長い期間、行きたい。周りの人にも薦めている。

――今回の経験を今後どのように活かしますか？

山口：被災地の方々は、「情報発信して欲しい」とおっしゃっていた。

池田：できるだけ広めたい。

松本：被災地の人たちの姿を見て、幸せって何か考えた。当たり前だと思っていることの価値に気付くこと、感謝することの大切さを学んだ。

原口：被災地の人たちが明るくて温かいのを見て、自分が悩んでいたことがちっぽけに思えた。壁にぶつかっても頑張ろうと思える。

早﨑：被災地の状況を目の当たりにして、毎日がどれだけ幸せだったかを思い知った。今があるのは周りの人の支えがあるから。人のためになるように生きたい。

穂満：時間の許す限り行きたい。

山口：行ける時に行く、無理をしない、というのが長続きする秘訣。情報発信に努めること、忘れない、ということも大切。被災地の現状は刻一刻と変わっていく。目を向けることを忘れないで。

命の大切さ。今ある日常が当たり前ではないと気付き、感謝する気持ち。被災地を思い続けること。

シスターエッセイ

この夏、幾度となく反芻（はんすう）したことばがある。「津波ですべてを失くしたからと言って、私はこの土地から離れようと思わんよ。考えてみ。海はずっとタダで人間に海産物を収穫させ、生活を守ってきてくれたんだよ」被災地で出会ったお婆さんのことばである。この深みのあることばは旧約聖書のヨブ記を想起させる。「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」（ヨブ記1章、21節）人は予期せぬ負の出来事に対して、責任転嫁や現実逃避によって心の均衡を保とうとする。しかし、現実を恨むのではなく、これまで授かった恵を感謝する心と人間の力を超える存在に信頼と希望をおいてゆだねる心は、ゆるぎない心の平和を保ち、人を前進させる原動力となることを教えていただいた。豊かな人生経験の中で悲しみや苦しみを幾つも乗り越えてこられたであろう姿を、笑顔によって深く刻まれた味わいある皺（しわ）に見た思いがする。

シスター　山口明美

▼純大VOICE

教職員、学生、保護者、卒業生、それぞれの立場で、純大の魅力を語る！

教職員

島　立久教授
こども学科

▼ 純大の良いところを一言で言うと？

授業の始まりと終わりのあいさつ。特に終わりの「ありがとうございました」は、とても新鮮。ちなみに、小学校は「はじめましょう」「おわりましょう」です。

▼ キャンパス内でお気に入りの場所は？

教員養成センターの一隅。所員が集まると、笑いが絶えない。コーヒーが美味しい。ゆっくり語れる。そして、独り言が活きる、そんなところです。

▼ 学生に期待することは？

学校という空間の中で学ぶことの意味は、「よき出会い」にあります。そのあとの人生を、考え方を決める「よき出会い」に期待します。人生邂逅の連続。自分の夢を描き、夢に向かって、教師、友人等々様々な出会いの中から自分色の輝きを出してほしいものです。

学生（学生会長）

柿元　麻弥さん
ことばと文化学科3年
（加治木高校出身）

▼ 純大の良いところを一言で言うと？

純大ではしなやかな女性らしさとともに、精神的な面での力強さとたくましさを身に付けることができます。また、私が経験したことで言えば、何かのトップに立つ時や力仕事をする時に男性を頼ることができない分、リーダー性とチームワーク力を養うことができることです。

▼ キャンパス内でお気に入りの場所は？

私のお気に入りの場所は、駐車場と管理棟の間にある花壇です。ここには春から夏の間、沢山の百合の花が咲きます。百合は純心の象徴でもあるし、私の好きな花でもあるので、お気に入りの場所となっています。

▼ 将来の夢は？

私は、教員または公務員を目指す一方で、国際関係の仕事も考えています。また、留学を予定しているので、そこで刺激を受けながら自分の将来を決定したいです。留学の目的は自分の語学能力を高めることはもちろん、共通文化と異文化を認識・実感し、理解すること。留学先は日本に対して友好的な国ですが、国のシステムや日常生活での行動・言動のギャップに驚くことや感心することがあると思います。それぞれの国の特性を受け入れて理解することは、教育現場においては児童や生徒への理解、社会現場においては仕事内容や仕事で関わる人たちについての理解に生かせると思います。先入観にとらわれず自分の目で見て、感じて、学ぶ力を身に付けたいです。

保護者（後援会長）

森　浩一郎氏

▼ 純大の良いところを一言で言うと？

環境が特に素晴らしいと思います。勉学に集中できる環境が整っています。緑豊かな自然環境。勉学の環境に関しても充実した教育施設，学生に対し親身な先生方と素晴らしい環境の中で勉学に励める学生達が羨ましく思えます。

▼ 純大に入学してから娘さんを見ていて成長したと思えるところは？

今までも自分の興味のあること，好きなことにはしっかり集中して取り組んでいましたが，何事にも興味を示す様になってきました。また，色んな事を真摯に具体的に取り組めるようになった様に思います。

▼ 大学に期待することは？

この就職難の時代にあって，高い就職率を維持し，少子化の波を乗り越えて頂きたいと思います。純心学園創立者江角ヤス先生の言葉である「聖母マリアのように、神様にも人にも喜ばれる女性を育成すること」が鹿児島純心女子大学の建学の精神です。「マリアさま いやなことは私が よろこんで」という言葉を心から実践でき，一人ひとりが人の嫌がることや，目立たない小さな奉仕を勇気を持って行うことのできる「優しくたくましい女性」を育て，建学の精神を学生達に伝承し，歴史伝統ある大学になってほしいと思います。

卒業生（同窓会長）

追立　文さん
同窓会・白百合会会長
（１期生）

▼ 純大の良いところを一言で言うと？

設備が整った贅沢なキャンパスで、望む職業に関わらず建学の精神に基づいた確かな術を女性の視点で学べること。教職員の多さ、手厚い就職支援体制など充実したキャンパスライフ支援も魅力的。

▼ 学生時代に一番印象に残っているエピソードは？

１期生として入学し、何もかもが初めてだったので色々ありすぎて一つに絞れないですが、入学式の日に真新しいキャンパスに一歩足を踏み入れたときの感動や、学生生活に対する期待感は、一生忘れることが出来ないと思います。

▼ 後輩に期待することは？

開学して20年近い時が流れ、先の大震災後は特に各地で卒業生同士のつながりが大切にされるようになってきています。多くの卒業生が鹿児島、日本、世界のあちこちで羽ばたき、つながりを感じられるようになると心強いと思います。

その為に、卒業生のこれまでの積み重ねを大事にするだけでなく、いつも新しい“純大らしさ”を求めて行動することで一人一人が自分らしく輝き、そしてつながることでそれぞれを高め合い、素敵な“純心おごじょ”で居続けられるのではないかと感じています。

「海外日本語教育インターンシップ」　ことばと文化学科

■海外実習ならではの刺激で人間を磨く

ことばと文化学科　教授　田原良子

教員による実習解説

■ねらい・効果

これは、約１年間ホームステイしながら、オーストラリアのパースの中等教育機関において日本語教育の助手をするプログラムです。国際交流基金からの補助金を受けて行うプログラムのため、渡航費や滞在費などの財政的負担無く海外における日本語教育を実体験できます。日本語の教え方のノウハウを学ぶことはもちろん、多文化社会パースでの様々な人々との交流を通して英語力を含むコミュニケーション能力や対人力に磨きをかけ、異文化への理解を深め、視野を広げて、一回りも二回りも大きくなって帰ってくることを期待しています。

■充実した10ケ月で成長を実感

英語コミュニケーション学科（現ことばと文化学科）４年
國生夏紀さん（松陽高校出身）

学生による実習紹介

■心に残ったエピソード

10ヶ月間、パースで日本語教師のボランティアをする機会を頂きました。会話指導やテスト作成、宿題のチェックなど高校教師のアシスタントとしての活動は様々で、全てがかけがえのない貴重な経験でした。その中でも生徒との思い出が印象に残っています。先生と呼ばれることの嬉しさに始まり、勉強を教えたり、相談を受けたりと、日々成長する彼らを教える立場から見ることはとても新鮮で、大きな喜びでもありました。生徒一人ひとりが私のパースライフを有意義なものにしてくれたように思います。

■学んだこと

インターンシップを通して学んだことは、ベストを尽くすことです。10ヶ月間のうち私が一番嬉しかったのが、何かを頼まれるということでした。どんなに些細なことであっても、相手からの信頼があってこその依頼だと思うからです。その信頼を得るためにも今できる一つ一つに自分なりのベストを尽くすこと、それが自分自身の成長、そして充実した人間関係につながるのだと学びました。

教育実習Ⅱ（幼稚園）　こども学科

■現場体験で人と関わる力を育成

こども学科　准教授　広瀬健一郎

教員による実習解説

■ねらい・効果

幼稚園の実務に携わるためには、子どもの心や保育技術に関する知識だけでなく、人と関わる力が問われます。先生方に質問をしたり、先生方の指示を的確に把握して行動したりすることや、迅速に報告することができなくてはなりません。幼稚園の仕事に自ら進んで何でも取り組もうとする積極性も必要です。こうした、保育以外の部分をしっかり身に付けることで、実は保育技術の習得や子どもの理解がより充実したものとなります。実習を通じて、園の先生方としっかりとコミュニケーションをとり、先生方から保育の技を盗み、自分のものにしていくような力をつけて欲しいと願っています。

■気づいてもらうための方法

本学では、1年次の「こども学フィールドワークⅠ」、2年次の「保育実習」等を中心に、子どもや保育者と直接かかわる場面を豊富に用意しています。たとえば「こども学フィールドワークⅠ」（学外）では、薩摩川内市内の幼稚園や保育所を1年間を通じて定期的に訪問し、保育のお手伝いに従事します。実際に子どもたちや保育者と関わる経験を通じて、保育の場で自分がするべき仕事は何で、どう動けば良いのかを自分で判断し、的確に行動する力を、3年次の幼稚園実習までに身に付けて欲しいと願っています。

■自ら考え、行動することの大切さを学ぶ

こども学科３年
西あゆみさん（熊本県・人吉高校出身）

学生による実習紹介

■心に残ったエピソード

教育実習（幼稚園）の授業では１年次のこども学フィールドワーク、２年次の保育実習で学んだことをふまえて、日誌の書き方や保育者としてあるべき姿など実習に備えての姿勢を養う授業を行います。

私は地元熊本県の幼稚園で実習をさせていただきました。３週間の教育実習（幼稚園）では、こどもの気持ちに寄り添い、様々なことを共有していくことを目標に臨みました。はじめの１週間は、年中児と年長児の縦割り保育の観察実習を行い、２週目は年少児のクラスの観察実習を行いました。３週目は全クラスで設定保育をさせていただきました。設定保育は朝のお預かりから朝礼、主活動、給食指導、午睡前の読み聞かせをしました。指導案を作成する設定保育では予想外のこどもの行動や時間配分がうまくいかず失敗することも多々ありましたが、こどもの様子を見て臨機応変に対応することが求められる、ということを学ぶことができました。

■学んだこと

実習ではこどもと遊ぶことだけが仕事ではなく、壁面構成、翌日の保育の準備などより良い保育をするための仕事もあるということを学びました。教育実習（幼稚園）の授業を通して、より良い保育者になりたいという気持ちが強くなりました。ひとつひとつの経験や授業を大切にして、こどもの気持ちに寄り添える保育者になりたいです。

「コミュニティケア実践」　看護学科

■人の生活や人生に寄り添う保健師の姿勢に学ぶ

看護学科　教授　徳永龍子

教員による実習解説

■ねらい・効果

看護系大学は、保健師教育課程を大学の卒業要件としてきました。コミュニティケア実践は、保健師教育の必須科目です。保健師は、一定の集団や地域を受け持ち、生活者全体の健康の保持増進に向けた活動を組織的に展開する看護専門職です。学生は、保健所、市町での保健師との共同実践を通して、生活者である人間が生まれ、自律して生き、死ぬなりわいの中で抱く誇りや覚悟に寄り添い信頼に基づく生活・人生を支援する地域看護の必要性を痛感します。

■気づいてもらうための方法

実践への自信・イメージ獲得のために、学生は課題と事例で２回の家庭訪問、健康教育の演習を積みます。実践の約２か月前には、保健所、市町に希望事例を持参し計画に赴きます。その後学生は、実践目標と希望根拠を明記した「実習に臨んで」、地域診断、健康教育、家庭訪問の計画案を基に保健師・教員と指導、助言を重ね計画後、実践を行います。学生は、多種多様な病気、障害、困難と共生する生活者の自律した人生の中から看護者としての社会協働性について学びます。

■プロの視点、知識・技能に感動

看護学科４年
福留美加さん（川内高校出身）

学生による実習紹介

■心に残ったエピソード

２人の子供を持つ母親を家庭訪問しました。母親は、メディアや周囲の母親の話に影響を受けて自信喪失し、育児不安になっていました。保健師は、母親の育児の話に相槌を打ちながら熱心に傾聴していました。自分の頑張りに気づかない母親に、頑張りを認め伝えると共に、“私は頑張っている”と口にすることを促すと、短時間で母親自身が育児への自信を取り戻し、その子なりの発達や良さを語り始めました。保健師の個別性に応じた“今”必要な支援に気づく感性と視点、健康増進の知識や技能に感動しました。

■学んだこと

大学で２回の家庭訪問の演習をして実践に臨みました。しかし、実践で出会った人々は多種多様で、その人の生活に応じた必要な支援ができませんでした。実際に住民の生活の場へ入り保健活動を実践してみると、個人・家族・集団自身が健康を育み生活することが、こんなにも困難なのだと痛感しました。病院で看護する患者さんにも家庭と住む地域があります。病気だけでなく、患者さんの生活まで考えた看護の必要性を学び、看護の幅を広げることができました。

臨地実習Ⅰ（病院）　健康栄養学科

■体験を自分のものにする強さを身に付ける

健康栄養学科　准教授　木之下道子

教員による実習解説

■ねらい・効果

３年生は前期試験が終り、夏休みに入るとすぐ病院実習が始まります。この実習は３年半大学で学んできた事を患者様相手に実践することで、教室でしか理解できなかった栄養管理を直に肌で感じることが出来る貴重な体験です。同じ年代の交流が多い学校環境から幅広い年代が入院している病院へ、生活環境・食習慣が異なる対象者指導は教科書どおりにいかないことが多々出てきます。その時自分は学生だからと尻込みするのではなく、物怖じすることなく何事にも貪欲にぶつかって体験を自分のものにする強さを身に付けてほしいと思います。さらには先輩達の頑張っている姿に接することによって、近い将来、職種を選ぶ貴重な体験にもなってきます。どんな状況でも前向きな気持ちで対応する柔軟さを育んでほしいと思っています。

■気づいてもらうための方法

病院実習で学ぶことは指示待ちではなく、自分から積極的に行動する大切さです。実習項目として①患者様を中心に医師、看護師等の医療職と共に治療効果を上げるチーム医療に参加する、②患者様に満足いく食事が万全な衛生管理のもと、提供されるまでの経過を把握する、又おもてに表れない仕事の大切さについても学ぶ、さらには③栄養指導をどのように行えば患者様が納得して行動変容させることができるか、栄養指導の方法について学ぶ、などがあります。これらは管理栄養士として必須であり、受け入れ病院側も一生懸命指導をしてくださいます。この様にして社会で働くことの厳しさ・楽しさも先輩達から指導を受けてきます。また自分の長所・短所に気付かせてくれ、今後自分はどのように勉強したら良いかの一つの道しるべとなることもあるでしょう。このように病院実習を経験することによって、皆一段と成長して帰ってきます。

■失敗や反省から精神面でも成長

健康栄養学科３年
西園友紀さん（野田女子高校出身）

学生による実習紹介

■心に残ったエピソード

臨地実習Ⅰで、私は出水総合医療センターで病院実習をさせていただきました。実習では、病院管理栄養士の業務内容や役割、患者さんにとっての管理栄養士のあり方、臨床栄養等を学びました。

特に地域の糖尿病教室の参加者の方々の中には、若くして糖尿病になってしまった方、家族が糖尿病なので食事面からのサポートを望み参加された方、そして糖尿病歴がとても長い方など、様々でした。一緒に調理をしながら患者さんとの触れ合いを通して、普段耳にすることのできない貴重なお話や個人の意見を聞くことができ、本当に何よりも勉強になったと思います。

■学んだこと

今回の実習を通して、病院管理栄養士の大変さ、責任の重さや、患者さんにとっての管理栄養士のあり方などを学び、改めて管理栄養士という仕事に憧れを感じることができました。また、失敗や反省から自分の勉強不足を痛感した上で、得意とするところ、苦手とするところを知ることができ、精神的な面でも大きく成長できたのではないかと思います。そして、これからの自分の進路を決めるにあたっても、大変為になる実習になりました。

この実習を通して学んだことを、自分自身の糧とし、これからにつなげていきたいと思います。

こども発達臨床センター

親子の支援を考えよう 純心こども講座

こども学科では、こども発達臨床センター主催の「純心こども講座」を毎年実施しています。親子で一緒に活動する講座として、今年度は4回の開催を計画。こども学科の1年生が広報・企画から当日の活動まで指導補助員として関わり、運営を行っていきます。

子どもとその保護者の支援を考えるという点で、「こども学」の初年次教育として大きな役割を担っています。普段では体験できないような楽しい講座を心がけて、みんなで協力して作り上げています。

6月「音楽であそぼう」

10月「からだを動かすあそび」

参加された方々からは「もっと回数を増やしてほしい」との感想をいただき、リピーター率も高い講座です。また、「一生懸命走っている姿が新鮮だった」など普段では見られない子どもの様子も発見されるようです。

学生の視点から

こども学科　1年　早﨑安侑美さん（熊本県・八代南高校出身）

7月の講座「つくってあそぼう」では、親子が七夕の世界観の中で楽しく、おもちゃを作り、また遊ぶことができるよう頑張りました。

準備の段階で、手作りのおもちゃを自分たちで考える際は、中々思い通りにいかず、発想力の低さと知識不足を痛感しながら試行錯誤を繰り返しました。また、親子が楽しくおもちゃ作りを行えるような環境作りにも力を注ぎました。始めは参加者の様子が想像もつかず、どう振る舞えば良いのか分かりませんでしたが、リハーサルを重ねることで親子の安全面を配慮できるようになり、聞き取りやすい声かけのコツを掴むことができました。

7月「つくってあそぼう」

当日、保育者役の学生は皆全力を出し切り、講座を楽しく終えることができました。これも、笑顔でかつ真剣におもちゃを作って下さった参加者の方、暖かく見守って下さった先生方や先輩方の励ましがあったからこそです。

仲間と一緒にこども講座の企画・運営から学んだことを、今後の実習や大学生活に活かしていきたいと思います。

附属博物館

学生の提案で決定!! 企画展作成

附属博物館では、博物館実習Ⅰの実習と博物館サークルの活動として、毎年大学祭で企画展を行っています。

今回の企画展は博物館実習Ⅰを履修している学生の提案で「郷土玩具のお面展」というテーマで行われました。

展示資料は附属博物館の収蔵している資料のみを用い、実習のなかで常設展示と収蔵資料の中からお面に該当する資料を抜き取る作業から始めました。台帳と資料を照合しながらキャプションパネルを作成し、演示台も自作して大学祭前日に展示作業を行いました。観覧者が見やすい展示を心掛け、現在、約百点のお面が展示されています。

見やすさを心掛けて展示

留学報告

英語力を磨き、英語による教育実習にもチャレンジ！

留学先／西シドニー大学（オーストラリア）

英語コミュニケーション学科　4年　川路あゆみさん（伊集院高校出身）

留学しようと思った一番の理由は、自分を変えたいと思ったからです。オーストラリアでは語学学校の50週のコースに入学。始めの20週は語学学習のみの期間で、30週目には西シドニー大学と語学学校を並行して通う形になりました。40週目では英語の4つのスキルの集中コースに入り、50週目には語学学校のティーチングコースへと入っていきました。このコースでは、TESOL※の実習内容と全く同じことを経験させていただきました。私が担当したのはサウジアラビア、UAE、トルコ、中国から来ていた学生たち。文化も年齢も様々なクラスだったので授業をするのは難しかったですが、とても良い経験になりました。また、自分の良いところを見つけることができ、自信にも繋がりました。欠点もたくさん見えてきましたが、改善することに努め、前向きに考える習慣がつきました。それから、何事にもチャレンジする姿勢を持つようになりました。留学中、様々な国の様々な文化を持つ人々と話し慣れてきたせいか、前よりもコミュニケーション力が付いたとも感じています。

※TESOL…英語を母国語としない人たち向けの英語教授法

アクティビティの宝庫のような先生から英語教育の手法を学びました。

大学院TOPICS

修了生をバックアップ 大学院修了後研修

大学院
人間科学研究科
研究科長 久留 一郎

本学大学院人間科学研究科心理臨床学専攻は、臨床心理士の養成校として9年目を迎えています。修了生も約80名にのぼり、それぞれ現場でカウンセリング業務などに携わり活躍しています。そこで、本年度から「大学院修了後研修」を実施することにいたしました。

本大学院が養成している臨床心理士の資格は実は更新制です。積み上げる日々の研鑽が5年ごとに審査され、認められると更新することができます。この「大学院修了後研修」も正式に認められる研修の場のひとつです。

前半は「支援者支援とセルフケア」と題し、シンポジウムを行いました。セルフケアやコンサルテーション、スーパーヴィジョンといった事柄について、支援者自身のセルフケアの観点から活発なやり取りが交わされました。

後半は、修了生から募った事例についての事例検討会を開催しました。修了生の研鑽の場としてだけでなく、現場で真摯に取り組んでいる修了生の姿に安堵する機会にもなりました。

研究室探訪

アットホームな雰囲気でゼミ生と日々研究

大学院
人間科学研究科
准教授 石井 宏祐

大学院の修士課程は2年制です。私の研究室には各学年2人ずつ所属しており、ゼミ生4人のアットホームな研究室です。

専門は家族療法です。家族の誰かの問題を、家族や身近な人の力を合わせて解決しようとする心理療法です。研究テーマは嗜癖（しへき）です。嗜癖とは、「その人にとって利益をもたらしていた習慣が、不利益をもたらすことになってしまったにも関わらず、その習慣が自動化しコントロールできなくなった行動」のことです。やめたいのにやめられない、アルコール依存やギャンブル依存、ゲーム依存などを含みます。臨床活動は、本学大学院心理臨床相談センターでのカウンセリングや、公的機関での復職支援、また嗜癖からの回復を続ける方々のグループワークに携わるなどしています。

ゼミ生の研究テーマは幅広く、各自が深めた関心を大事にしながら修士論文の完成をサポートしています。

サークル紹介

大学祭でデビュー!!

漫画研究同好会

部長 田中晴菜さん
健康栄養学科 1年
（鹿児島純心女子高校出身）

それぞれが好きなジャンルで楽しんでいます

私たち漫画研究同好会は今年新設されたサークルです。ジャンルはイラスト、漫画、小説など様々ですが、みな自分の世界観を広げ創作を楽しみ、作品を作ることに力を入れています。

また漫画やアニメ、小説などを通してのコミュニケーションも盛んに行っています。

新設サークルではありますが、今年から大学祭で展示を行い、個性の溢れるイラストや、漫画、小説の無料配布もしました。

県リーグ戦で初勝利!!

バスケットボール部

部長 吉水千夏さん
健康栄養学科 3年
（志布志高校出身）

バスケットボール部は、現在1年生5人、2年生7人、3年生3人の計15人で活動しています。学年学科は様々ですが、みんなとても仲が良く、毎週楽しく活動しています。バスケットボール部は24年度、初めて鹿児島県主催の県リーグ戦に参加し、先日初勝利をあげました。現在は、12月にある2つのリーグ戦に向けて、日々練習を頑張っています。これからも部員一同、明るく、そして楽しく頑張っていきたいと思います。

ユニフォームに身を包んだメンバー

大学祭

魅せよう輝きのメッセージ
～純心から笑顔と明るい風を～

大学祭実行委員長
ことばと文化学科３年
前田綾さん

5月に大学祭実行委員会を発足してから約半年、10月27日、28日の両日のために、委員全員が気持ちを一つにして準備を進めてきました。準備期間中は、夜遅くまで残っても終わらない作業や、予期せぬアクシデントなど、うまくいかないことが数多くあり、辞めてしまいたくなる瞬間もありましたが、その度に同じ委員の頑張りや、友人、先生方からの協力、企業や地域の方々からの援助や温かい応援、シスターの美味しいご飯などに支えられて、最後まで頑張ることができました。ずっと心配していた天気も、ミサでのお祈りやテルテル坊主のおかげで、少し雨が降りはしたものの、良い天気に恵まれました。当日、委員や学生会はそれぞれの係で走り回るなど、とても忙しかったのですが、ご来場くださった皆様や学生たちの楽しそうな様子を見て、無事開催できて良かったと嬉しく思いました。

大学祭準備のために犠牲にしたものもありましたが、それ以上に、新たな友人や、達成感、精神面、知識面、技能面など得たものが多く、以前の自分より一回り成長することができたと思います。普通に過ごしているだけでは絶対にできない体験をさせて頂き、実行委員をして本当に良かったと思います。そして、大学祭を無事に開催、終了できたのは、協力してくださった沢山の方々のおかげです。本当にありがとうございました。

地域交流・地域貢献

□1年生の恒例行事 はんやまつり

11月4日（日）、薩摩川内はんやまつりが盛大に行われ、1年生と教職員有志の総勢１４０名が参加しました。本学は、日頃からお世話になっている市民の皆様への感謝の気持ちを込めて、毎年1年生が参加しています。

あいにくの雨模様でしたが、お揃いの浴衣と法被姿で市街地を練り歩き、掛け声も元気よく祭りに華を添えました。

台湾からの留学生は武者行列に参加し、鎧を身に付けて、日本の文化を体感しました。

市民の皆様と一体となり充実した1日となりました。

□街づくりを考えよう かのこゆり会

「かのこゆり会」とは、「薩摩川内市大学交流推進懇話会」での本学学生の発言を受けて、若者の新鮮なアイディアを市政に活かしたいとの岩切薩摩川内市長の提言により実現したものです。平成22年度より開催され、気軽に意見を出し合えるよう、メンバーは薩摩川内市の若手職員と、本学の学生会役員等で構成されています。

今年度は「"地域の資源"を活かしてみよう」というテーマです。初回は薩摩川内市より現状や課題等について説明を受け、2回目は有識者をお招きして街づくりの実際についてお話を伺い、それぞれ率直な意見が交わされました。最終的には懇話会に報告することになっています。

学生がこの会を通して行政に目を向けることで、薩摩川内市にとっては地域の活性化等に、本学にとっては教育的効果にも繋がることが期待できます。

平成25年度入試情報

※詳細は『平成25年度学生募集要項』でご確認ください。

入試区分	出願期間	試験日	合格発表
一般入学試験（第１期）	1月15日(火)～2月1日(金)	2月12日(火)	2月15日(金)
大学入試センター試験利用入試（A日程）（国際人間学部，健康栄養学科のみ）		2月12日(火)・国際人間学部は独自試験はありません ・健康栄養学科は面接のみ実施	
大学入試センター試験利用入試（B日程）	2月14日(木)～2月22日(金)	3月4日(月)・国際人間学部は独自試験はありません ・看護栄養学部は面接のみ実施	3月5日(火)
一般入学試験（第２期）（国際人間学部のみ）	3月1日(金)～3月12日(火)	3月21日(木)	3月22日(金)
大学入試センター試験利用入試（C日程）（国際人間学部，健康栄養学科のみ）		3月21日(木)・国際人間学部は独自試験はありません ・健康栄養学科は面接のみ実施	

【問い合わせ先】鹿児島純心女子大学 入試広報課　TEL 0996-23-5311　FAX 0996-23-5030　Eメール exa@jundai.k-junshin.ac.jp

発行：鹿児島純心大学・大学院　広報委員会　〒895-0011 鹿児島県薩摩川内市天辰町2365番地　TEL 0996-23-5311　FAX 0996-23-5030　http://www.k-junshin.ac.jp/jundai/